

17/04/17

米中、冷戦時代から冷和時代に突入 100日計画は踏ん張り（アジア特Q便）

■米中関係は冷戦ではなく冷和時代に突入

習近平国家主席とトランプ大統領による初の首脳会談が終わり、米中「冷和」時代が本格的に動き出した。戦うことを前提に展開された「冷戦」時代と違い、冷和時代においてはアメリカと中国は複雑な利害関係で結ばれている。

米中両国は「和」を関係の基調として維持していく。対決は避けつつも、価値観から経済、軍事に至るまでのほとんどすべての分野において激しく競争していく可能性が高い。

アメリカと中国にとって激しい競争で生まれた対立が、対決に進化しないように「冷」と「和」のバランスを維持するのが重要な課題になる。

■米中首脳会談の笑顔は和の側面

米中双方において、競争・対立を際立ちかねないような局面が常に現れる。一方、和の維持に努めるアピールも続く。こうした米中関係の構図は米フロリダ州パームビーチの別荘「マー・ア・ラーゴ」で開かれた今回の首脳会談と一連の動きで明白に映し出されている。

風光明媚な景色を背景に両首脳の満面に溢れる笑顔、いかにもリラックスしているかのような散歩、そして熱を込めての固い握手…。不透明と言われるトランプ政権下でも、米中関係をきちんとマネージしているとのメッセージが世界に強く発信された。

テレビやソーシャルメディアなどを通じて映し出されたこうした一連のシーンは習主席とトランプ大統領による米中関係の「和」の側面のアピールだ。

■シリア攻撃は冷の側面、100日計画は関係者の踏ん張り

冷和の関係である以上、「冷」を表す競争と対立も米中間で常に存在している。シリア問題の解決に政治的手段で望むべきだと主張してきた中国の習主席を歓待する晩餐会が催される最中、米軍によるシリアへのミサイル攻撃が開始された。

トランプ大統領がどれだけシリア攻撃を対中関係と絡めて考えていたかは定かではない。少なくとも世界が見守るなかで、北朝鮮問題の解決に向けて公然と中国に圧力をかける意図があったのは確かであろう。

具体的にどのようなやり取りがあったかはまだ判明しないが、100日の期限を設けて米中両国の直面する経済問題の解決に着手していくとの合意の背景に、人民元の為替水準や貿易不均衡といった問題をめぐり両国間できわめて激しい駆け引きがあったと推測される。

習主席とトランプ大統領の首脳が融和ムードを演出していた舞台の裏に、両国関係を冷やしかねないような問題の解決に両国の関係者が踏ん張った結果が100日計画だろう。

■ G2時代では2Bのアプローチ

一時期、米中2大国で国際社会の秩序を担うとするG2（Group of Two）論が喧伝された。これがどれだけ現実的な意味があるかはともかくとして、筆者は「冷和」時代に入った米中関係、とりわけ経済関係がこれから2B、つまりバイラテラル（By Bilateral）とバイケース（By Case）で展開されていくとみる。

つまり、トランプ政権の強いイニシアティブによって、貿易不均衡や中国市場へのアクセス障害といった経済問題を解決するに当たってWTOのような多国間の枠組みを主たる手段として使うよりも、バイラテラルの交渉でケース毎に双方の損得をめぐって交渉しながら解決案を見出していくというアプローチがとられていく可能性が高い。

今回の首脳会談を契機に、バイラテラルとバイケースで動く米中「冷和」構造の幕が切れて落とされたとみてよかろう。